2007.07.19 ～ 2008.07.03 更新

昭和の井上　靖

萩原　義雄

作品俯瞰

人が人として誰もが有する内面の孤独を実に見事までに描きだし、現代小説の最高峰と読者を言わしめる筆法を井上靖に探ってみよう。とはいえ、作品凡てが佳品とは言えないのが世の常である。当然例外もあって然り。その一つに初期の作品群『白い牙』『暗い平原』などは『井上靖全詩集』が投影されていて、洗練さに欠け、聊か稚拙さを感じないわけではない。「詩」は処女詩集『北国』〔一九五八年、東京創元社刊〕に限らず一人称「私」の頻出の多い短文体に近い散文詩である。上記の小説は、その延長線上にあるもので、後の作品とはまるで趣きを異にすることが指摘できる。今一つは、彼の晩年の作品群である老年心理小説『石濤』『孔子』『流沙』などは、文章そのものが枯淡化され、筋立ての展開力が失われてしまっている帰来もある。

作者の最も得意としたのは「**青春小説**、**歴史小説**、**現代小説**」の三つの分野である。自伝青春小説『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』が三部作として知られ、『あすなろ物語』を超えた作品である。自らの幼少期を回想する『幼き日のこと・青春放浪』や、老いた母を描く『わが母の記』、さらには『姨捨』も、作者自身の体験から取材した作品群である。『少年・あかね雲』は少年・少女を中心に

据えた短編集で、『星よまたたけ』は作者唯一、昭和三〇年代の童話集である。

歴史小説では、最初の『漆胡樽（しっこそん）』〔一九五〇年四月〕の発表作品がある。「漆胡樽（しっこそん）」とは何か、「黒漆角形の巨大な一対の器物」で、古代アジア西域に住み駱駝の背に懸けて水を運ぶために用いられた樽を云う。この器物が辿る流転の運命を描く。また、同趣向の『玉碗記』〔一九五一年六月〕があり、孰れも器物の運命を人の運命に投影してみせる。『異域の人』〔一九五三年七月〕、『僧行賀上人の涙』〔一九五四年三月〕が続いて書かれる。

井上靖童話集『星よまたたけ』（新潮文庫）亡くなったお姉さんが日記に書き残した「高い山、青い湖」という謎めいた文字。その言葉の秘密を解くために琵琶湖や芦ノ湖をたずね歩くゆかりちゃんの前に、思いがけない事実が…。表題作ほか、ひょんなことから地球にやってきた月のウサギのピロちゃんの冒険『銀のはしご』、ショート・ショート『猫がはこんできた手紙』『ほくろのある金魚』など四編を収めた著者唯一の童話集。

その後、日本の古代・中世を舞台にした『額田女王』『後白河院』や戦国時代を舞台にした『風林火山』『真田軍記』『戦国城砦群』、茶人である千利休（宗易）を弟子である本覚坊遍好が師を語る『本覚坊遺文』、幕末の日本人、大黒屋光太夫のロシア漂流実話〔異文化体験に基づく人間の成長記録を叙述〕による『おろしや国酔夢譚』、など、いずれも佳品が揃っている。日本と中国文化交流作品では、鑒真和上渡航記ともいえる『天平の甍』があり、『風濤』〔元国が響導（イイワケ）役を高麗国に命じた詔書の一節「風濤険阻ヲ以テ辞ト為スナカレ。未ダ曾テ通好セザルヲ以テ解トナスナカレ」の冒頭語より題名とし、元寇の役を大陸高麗側から描き出す〕はこれに続く。また、中国大陸を舞台にした歴史小説『敦煌』『蒼き狼』『楼蘭』『楊貴妃伝』『崑崙の玉』など、大陸文化と歴史の流れに実在する

人物像の魅力をふんだんに描いた作品がここにある。

この歴史小説の多くが映画化されてきた。千利休四百年遠忌特別作品『本覚坊遺文』は、熊井啓監督により89年度ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞を受賞した作品である。初出「群像」（昭和56年・1～8）書き出しは、「現在、私の手許に、慶長、元和時代を生きた茶人が綴った手記がある。茶人というより茶湯者といった方がぴったりするかも知れない。和綴五帖、いずれも和紙二十枚ほどをぎっしりと細字で埋めてあって、独白体、日記体、メモ風、統一がないと言えば統一がないが、頗る自在な書き方をしている。 利休の弟子に三井寺の本覚坊なる者がいたが、あるいはその人物の手になるものではないかと思われる節がある。長く筐底に蔵していたが、今やそれを私流の文章に改め、輻湊している部分は整理し、足らざるところは補い、全篇に亘って多少の考証的説明も加え、一篇の現代風の手記として披露してみたい気持、切なるものがある。手記には題はないが、仮りに「本覚坊遺文」と題しておく。」とある。人間関係の最も大切な「師弟関係」がここに表出する。師千利休と弟子本覚坊の在りし日の姿として…。平成元年九月刊行の『孔子』にもその一端が見て取れる。

現代小説では、男女の愛を見据えた『ある落日』『愛』にはじまり、現実世界からの逃避を試みようとするドン・キホーテ的な主人公の魅力を表出させた『四角な船』『夜の声』、さらに「生と死」を底辺とした『化石』『星と祭』などと魅力的な作品がある。

そして、芥川賞受賞作の短編集『猟銃・闘牛』http://www.asahi-net.or.jp/~dr4i-sn n/inoue_yasu-ryojyu-togyu.html、

『猟銃』〔本文の抜粋〕

その人は大きなマドロスパイプを銜えへ、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍

ら、初冬の天城の間道の叢をゆっくり分け登っていった。二十五発の銃弾の腰帯（バンド）、黒褐色の皮の上衣、その上に置かれたチャチル二連銃、生きものの命絶つ白く光れる鋼鉄の器具で、かくも冷たく武装しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の猟人の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた。

その後、都会の駅や盛り場の夜更けなどで、私はふと、ああ、あの猟人（ひと）のやうにあるきたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、つめたくー。そんな時きまって私の瞼の中で、猟人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫ちした白い河床であった。そして一個の磨き光れる猟銃は、中年の孤独な精神と肉体の双方に、同時にしみ入るやうな重量感を捺印（スタンプ）しながら、生きものに照準された時は決して見せない、ふしぎな血ぬられた美しさを放射しているのであった。～略～

雪山の滑落死と恋愛を絡めて描く主人公魚津を描く『氷壁』〔初出「朝日新聞」（昭和31年11月～32年8月）〕の書き出しは、「魚津恭太は、列車がもうすぐ新宿駅の構内へはいろうという時眼を覚ました。周囲の乗客はみな席から立ち上がって、たなの荷物を降ろしたり、合オーバーを着込んだりしている。松本でこの列車に乗り込むと、魚津はすぐ寝込んでしまい、途中二、三回眼を覚ましたが、あとはほとんどここまで眠りづめであった。」

※1…主人公のモデル

「松濤と美枝子さんの物語は、初め安川茂雄著『青い星』に小説化された。ふたりは井上靖著『氷壁』の主人公、魚津恭太とその恋人のモデルともされる」（平成19年8月18日「朝日新聞」掲載『愛の旅人』より）

※2…イロンザイル切断事件

石原国利（中央大学４年）と若山五郎（三重大学１年）が冬の前穂高Ａフェースを登攀中、ナイロンザイルが切れる。若山は墜落して死亡。麻のザイルに代わってナイロンザイルが出てきた頃で、その強度に問題はなかったか議論を呼んだ。ザイルメーカーと大学教授によってナイロンザイルの強度実験が行われて問題ないとの結果が出るが（蒲郡実験）、遭難死した若山の実兄の登山家・石岡繁雄らの尽力によって、徐々に蒲郡実験の不備が明らかになっていく。

上高地には若山の遭難碑が残っており、大町山岳博物館には遭難時のザイルと装備も展示されている。

※３：映画『氷壁』

大映映画。魚津恭太を菅原謙二が、小坂乙彦を川崎敬三が演じた。

現代人の孤独を掘り下げた『憂愁平野』など傑出したものがある。井上靖が描いた作中主人公には、人知れずの夢や理想を宿した人間像が多く描かれている。その一方で社会生活にあってはリアリストとして立ち振る舞い、それが陰と陽の二重構造化した孤独さにも繋がってゆく。『ある偽作家の生涯』は詩と美術記者体験を推理小説手法を駆使した名作短編である。『あした来る人』は、一組の夫婦の離婚問題を軸に、男と女の愛情の不思議さ、結婚の意味などについて語った恋愛小説。『黒い蝶』は半ば意図的な詐欺を働いた男がある事柄を契機に無謀ともいえる話に本気で突き進む話。『射程』は女性が原因でビジネスの世界に敗北する青年を描く。『花壇』では仕事をリタイアする男の男の哲学的心境を描く。さまざまな形の恋愛小説に『その人の名は言えない』『魔の季節』『白い炎』『紅花』『地図にない島』『月光』『若き怒濤』『遠い海』などが加わる。

エッセイとしては、『西域物語』『道・ローマの宿』『遺跡の旅・シルクロード』『河岸に立ちて』といった紀行文と作者の印象に残る芸術家について記した『忘れ得ぬ芸術家たち』、作者自身について語った『わが文学の軌跡』などがある。

井上靖の作品原稿

小説原稿は、自筆原稿と清書代筆原稿とが存在する。現存する自筆原稿のなかで、所蔵公開されたものとして、北海道旭川井上靖記念館所蔵の原稿 http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/files/bunkashinko/fuzokukikan6/16_2/shiryou.pdf がある。清書代筆原稿のなかで、妻井上ふみさんが書写した原稿の他に、小説『流転』は、父親である井上隼雄さんが清書したものが遺っている。

井上靖の新聞小説

二七篇の新聞小説は、夕刊新大阪新聞の『その人の名は言えない』〔昭和25年五月10日～9月30日、一四三回連載〕にはじまり、毎日新聞、読売新聞、朝日新聞、産経新聞、日本経済新聞、東京新聞、京都新聞、北國新聞が知られ、なかでも、朝日新聞連載小説『**星の祭**』〔昭和46年5月11日～昭和47年4月10日、三三三回〕は、主人公架山という六十歳の貿易会社の社長という人間像から人生観・十七歳の娘みはるのボート転覆事故という事件を以て彼の死生観を示した作品でもあり、自作解題を持った作品でもある。最後の新聞小説が日本経済新聞の『**異国の星**』〔昭和58年～59年、三〇四回〕で、長編小説として大衆に親しまれた。後に講談社文庫から上・下二冊で刊行されてもいる。

井上靖の小説と出版社

◆**新潮社**からの作品

『猟銃』『闘牛』『黯い潮』『ある偽作家の生涯』『玉碗記』『あした来る人』『敦煌』『あすなろ物語』『黒い蝶』『風林火山』『射程』『氷壁』『天平の甍』『しろばんば』『蒼き狼』『楼蘭』『補陀落渡海記』『洪水』『憂愁平野』『北国』『姨捨』『グウドル氏の手套』『風濤』『夏草冬濤』『額田女王』『後白河院』『幼き日のこと・青春放浪』『西域物語』『四角な船』『少年・あかね雲』『夜の声』『北の海』『道・ローマの宿』『遺跡の旅・シルクロード』『井上靖全詩集』『忘れ得ぬ芸術家たち』『星よまたたけ』『河岸に立ちて』『石濤』『孔子』

◆**角川書店**からの作品

『真田軍記』『愛』『ある落日』『 化石』『星と祭』『花壇』『満月』

◆**講談社**からの作品

『わが母の記』『楊貴妃伝』『本覚坊遺文』

◆**文藝春秋社**からの作品

『おろしや国酔夢譚』『崑崙の玉』『その人の名は言えない』『魔の季節』『白い炎』『紅花』『地図にない島』『戦国城砦群』『月光』『若き怒濤』『遠い海』『流沙（上・下）』

◆**中央公論社**からの作品

『暗い平原』『わが文学の軌跡』

◆**集英社**からの作品

『白い牙』

☆映画化された資料

一九五八年(昭和33年) 51歳 『天平の甍』により芸術選奨文部大臣賞を受賞作品。淡海三船『唐代和上東征伝』『続日本紀』『延暦僧録』を文献資料として、唐招提寺開祖、唐の高僧鑑真和上来朝を招請し、附随した留学僧の運命を年代記風に叙述するものである。

一九五九年(昭和34年) 52歳 『氷壁』その他により芸術院賞を受賞。

上高地『氷壁』の宿徳澤園 http://www.tokusawaen.com/

「眼」と「地」の構図

○魚津恭太は、列車がもうすぐ新宿駅の構内へはいろうという時眼を覚ました。〔第一章冒頭文〕

○魚津恭太は眼を覚ました。眼を覚ますと、いきなり腹ばいになり、まくら許に置いてある腕時計を見た。〔翌日のはじまり〕

一九六九年（昭和44年） 62歳 『おろしや国酔夢譚』新潮日本文学大賞

江戸末期ロシア国に漂流した伊勢の漂民大黒屋光太夫一行の苦闘を年代記にして描写する。桂川甫周著『北槎聞略』、亀井高孝『大黒屋光太夫』の文献資料を許に現地取材を以て書き下ろした作品である。ここには、異文化体験を通して成長していく人間記録が色濃く叙述されている。女帝エカチェリーナ二世の尽力を以て帰国する光太夫と磯吉は、江戸番町明地薬草植付場内に生涯を送るのである。

昭和35年（53歳）、ジンギスカンを扱った『蒼き狼』が、大岡昇平から「歴史小説は作者の主観を排して史実を重んじるべき」との痛烈な批判を受ける。忠言を真摯に受け止め、作風に変化が現れた。老いや死を見つめた作品、鎖国下のロシヤ漂流民を描いた『**おろしや国酔夢譚**』（昭和43年61歳）、

『風林火山』

この映画は、主演・山本勘助に三船敏郎、武田信玄に中村錦之介（後の萬屋金之助）、上杉謙信に石原裕次郎と云った当時の日本映画界を代表する匆々たる三人の俳優が顔を揃えた大作。

『本覚坊遺文』

千利休の死を描いた『本覚坊遺文』（昭和56年74歳）が書かれる。 歴史小説を中心に外国語に訳され、ノーベル文学賞の候補にもなった。

千利休の忠実な弟子、三井寺の本覚坊の手記の形で語られる、利休の死の意味。最高権力者秀吉との確執の中で、乱世における陀茶のあり方を問い、賜死を無言で受け入れた自刃によって完成した利休の精神を、ゆかりの、古田織部、山上宗二等の茶人の死と共に描き切った、日本文学大賞受賞の長編小説。

☆絶滅稀少人間図鑑「諸君！」連載第15回 http://www.lares.dti.ne.jp/~ymksan/Feature_20.html

《HP 参考資料》

ウラ青空文庫〔http://uraaozora.jpn.org/inoue.html

お気に入り読書ＷＥＢ http://www.geocities.jp/web_hon/01/inouey.htm

井上靖記念館〔http://www.fukido.co.jp/inoue/tenji.html#top

企画展・「安曇野を愛した作家たち」http://www.azumino.go.jp/event/060310/index.html

井上靖リンク集 http://www.rsch.tuis.ac.jp/~ito/research/y_inoue/y_inoue_links.html#sho

文庫本限定！「井上靖作品館」http://www2.plala.or.jp/baribarikaniza/inoue/